

連携医院のご紹介

今回は、故郷の広島市南区の青崎地区において、家庭医療の専門医として「地域の健康コンサルジュ」を目指しておられる坪田内科の松田聡介先生です。



松田院長(前列左)とスタッフ

医療法人 坪田内科

〒734-0051
広島市南区東青崎町11-15
電話/082-283-2356
院長/松田 聡介
診療科/内科・呼吸器内科・
消化器内科



○いつ開業されましたか。

中学のころから将来は「町のお医者さん」になりたいと考えており、そのイメージ像は、かかりつけ医の坪田先生でした。縁あってその先生の元に3年間勤務させていただき、平成27年4月には、診療所を継承させていただきました。

○毎日の診療で大切にされていることは何ですか。

「病院は楽しいことがあって行く場所ではなく、ストレスを感じやすい場所だ」と広島大学総合診療科の勤務医時代に、先輩に言われたことがあります。このため、患者さんの緊張が少しでも和らげばと、診察毎に1回は笑ってもらえるよう会話のキャッチボールを心がけています。

○開業医のやりがいは何ですか。

受診時に患者さん自身のことだけでなく、家族や近所の方の健康問題についても相談を受けるなど、患者さんから信頼を寄せられていることを実感する時です。また、私はこの地域で育ち、現在も暮らし続けているため、街中で買物中の患者さんによく出会います。その際も歩く姿や自転車に難なく乗れている

かなど患者さんの健康状態につながることに気がなってしまう。このように、診療だけでなく、食生活・住環境を含む患者さんの生活全般を受け止め、関わっていくのも面白いところです。

○県病院はどんなところですか。

青崎地区から公共交通機関で行くには不便な時もありますが、診療上、困った際は頼りになる病院です。専門診療科に加えて、総合診療科もあるので、診断が煮詰まっていない段階で相談できる点が、大変ありがたいです。



坪田内科外観

【取材後記】

健康問題を抱えている患者さんが家族や地域の方と笑顔で過ごせるためには、医療スタッフが患者さんとともに歩むことの大切さを改めて気づかされました。

県立広島病院からのお知らせ

1月のがんサロン

- 開催日 平成29年 1月25日(水)
- 時間 14:00~15:30
- 場所 新東棟2階 研修室
- テーマ 治療を受けながら自宅で安心して過ごすために
- 講師 中谷外科医院 中谷玉樹 医師
- 対象 悪性腫瘍(がん)で通院または入院されている患者さん 及び そのご家族
- 問合せ先 がん相談センター
TEL:082-256-3562(担当:佐々木)

院内活花展

12月8日~9日



当院の池坊華道部による活け花展示会は、毎年1回開催しております。

患者さんへ 紹介状 持参のお願い

初診時に他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費のほか下記の選定療養費のお支払いが必要となります。初診の際には、紹介状をお持ちください。

	医科	歯科
初診時に紹介状がない場合	5,400円	3,240円
他院への紹介にもかかわらず再診された場合	2,700円	1,620円

*当院では、予約患者さんを優先して診察しています。予約されずに受診されると待ち時間が長くなる場合がありますので、ご了承ください。

医療機関の方へ 診察予約 のお願い

患者さんを紹介する際には地域連携センターを通じての診察予約をお願いします。選定療養費の負担もなく、待ち時間も短く、患者さんへのご負担が少なく済みます。ご協力をお願いいたします。

もみじ



県立広島病院 〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号

※県立広島病院の様々な情報をホームページへ掲載しています。
県立広島病院 で 検索 (URL: <http://www.hph.pref.hiroshima.jp/>)



理念：県民の皆様に愛され信頼される病院をめざします



恭賀新年

新年を迎えるにあたり、ご挨拶申し上げます。今年の干支は酉年であり、ニワトリ(鶏)です。昔の鶏は採卵や食用というより、鳴き声で朝を告げる「時告げ鳥」として利用され、太陽を迎える神聖なものとされてきたようです。森羅万象は絶えず変化するものであり、私達の命も限りあるものですが、新たな朝日の光を浴びるとき生きる力が湧いてきます。

今年も広島県内の高度医療の砦として研鑽をつみながら、地域の先生方と連携して、県民の皆様方の健康をお守りすることに精進致します。引き続きまして宜しくごお願い申し上げます。



平成29年 元旦

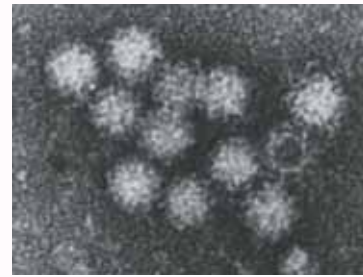
県立広島病院 院長

木矢克造

ノロウイルス対策

今年度は、感染性胃腸炎の流行が例年より早く始まり、大流行した2012年度を越す勢いです。特に問題となるノロウイルスは、2015年以降、新遺伝子型が多く検出されるようになり、免疫を持たない人が多いため、集団感染する可能性が高いと言えます。

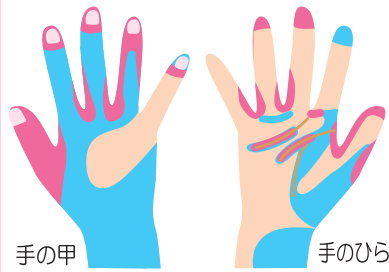
ノロウイルスは便や吐物から多く検出され、便1g中に600～900億個検出されます。また、感染しても症状が出ない人の便からも同様に多くのウイルスが検出されます。ノロウイルスは100個以下で感染が成立しますので、たったの便1gでかなりの感染力がある事が分かります。また、排便後にお尻を拭いた手には大腸菌を始めとした多くの病原体が付着することがあります。感染しない、また感染を拡げないためにもトイレに行った後や食事の手洗いが重要です。



ノロウイルス (広島市HPより)

予防は手洗いです！

汚れが残しやすい部分



● もっとも残しやすい部分
● やや残しやすい部分

❗ 洗い残しの多い箇所を意識しながら30秒以上掛けてしっかり洗いましょう。

❗ アルコール消毒剤も効果はありますが、汚れがある場合は効果がない為、トイレに行った後や調理前、食事前などは必ず石鹸を泡立てて、流水でしっかりと洗い流しましょう。

しっかり手洗い！



当院のがん医療の取組の取材を終えて...

昨年12月5日(月)にRCC放送年末特番『命をつなぐ～デーモン閣下が見た広島「がん対策」～』の取材があり、ナビゲーターとして広島県のがん検診啓発特使のデーモン閣下もお越しになりました。番組取材には木矢院長をはじめ板本副院長や消化器外科の眞次部長、消化器内科の佐々木部長が対応し、診察室では手術の説明をしました。カンファレンスではがん医療の取組に関わっているスタッフの意見交換を行いました。

お越しいただいたデーモン閣下、RCC放送取材班の皆さま、誠にありがとうございました。



がんの症状の説明をする佐々木部長



カンファレンスの様子



手術の説明をする眞次部長



チーム医療の重要性に答える板本副院長



がんのチーム医療に取り組むスタッフと記念撮影

外科医の独り言...no.64

— 余命宣告 —

テレビドラマや映画などで時々見かける場面に余命の宣告があります。余命宣告する場面は、何もがん患者さんに対してだけではありませんが、多くはがん患者さんが取り上げられます。そして宣告された余命を前提にストーリーが進み、宣告された余命通りに完結します。さて、医師は果たして何を根拠に「あと半年です」とか「あと1年です」という具体的な数字で答えているのでしょうか？

余命宣告の根拠として、世界中から集められたデータ、日本中から集められたデータ、あるいはその病院で集められたデータの平均値(あるいは中央値)を使っていることが多く、莫大なデータが基になっているので、一見正確であると勘違いしてしまいます。

例えば胃がんで肝臓にたくさんの転移がある患者さん3名が、何も治療を受けることなく診断からそれぞれ2か月、4か月、15か月後に亡くなったというデータがあるとします。すると3名の患者さんの平均生存期間は7か月ですが、生存期間の中央値(真ん中、すなわちこの場合は2番目に長生きされた患者さんの生存期間)は4か月になります。このように余命を平均値で伝えるのと中央値で伝えるのでは3か月の違いがあります。そもそも同じ胃がんの肝転移と言っても、患者さんそれぞれの体力、がんの性質、進行具合をとってもどれ一つ同じということはなく、胃がん肝転移をひとつくりにして、その平均値や中央値で伝えても正確に伝えたことにはなりません。かといって医師は予言者ではないので、個人の経験と勘だけで正確な余命を推定することはできません。

このようにすべての患者の余命を正確に推測することは不可能ですが、患者さんや家族から聞かれれば、平均値や中央値で答えざるをえません。そして医師の伝え方によってその数字が独り歩きし、患者さんや家族をパニックに陥れることがあります。

余命を正確に伝えることができない以上、医師は伝え方に気を配る必要があります。平均値や中央値を伝えることに異論はありませんが、

このデータは様々な異なる背景を持った患者さんの平均値や中央値であること、できるだけ条件をそろえた上でも生存期間にかなりの幅があること、そして最後に最良の結果を目指して前に進みましょうという言葉をつけ加える配慮が必要で。

がんも終末期に入ると徐々に体力を消耗し、様々な兆候が現われてきます。その兆候から余命を週単位、日単位である程度正確に予測することができます。ただし、これと予測外のことが起こるのが人間です。家族から「この前まで歩いてたのに」とか「昨日までそれなりに元気だったのに」という言葉を、後に聞くことがあります。患者さんがギリギリまで持ちこたえていたのが、急にそのエネルギーがなくなり、一見、急変したように見えます。実は、このような急変もがん患者さんの特徴です。急に悪くなることもある、ということもあらかじめ家族に伝えておかなければなりません。

さて、医師が患者さんや家族に説明する時、「私の経験からすると…」という言葉は聞くことがありませんか？この言葉を研修医が発すると「お前、何年の経験なんや」と突っ込まれます。もちろん、今このようなことを言う研修医はいません。では、何年経験すればこの言葉を使うことが許されるのでしょうか？

10年以上の経験があれば使っても良いと個人的には思っていますが、実は私自身、医者になって3年目くらいから連発していたような記憶があります。

元々老け顔だったので患者さんから怪しまれたこともなくクレームもありませんでしたが、今考えてみるとなんと失礼な医師だったのか、と深く反省している次第です。



副院長(消化器・乳癌・移植外科主任部長) 板本 敏行(いたもと としゆき)

第2回 地域連携推進カンファレンスの開催について

当院との入退院支援に係る連携について、一定の実績をあげて頂いている県内15病院等と、今後さらに連携を深めるため、11月18日に「地域連携推進カンファレンス」を開催しました。

当日は、各病院等からの現状説明に加えて、事例研究等も行いました。活発な意見交換が行われ、参加者間の交流も深めることができました。引き続き、患者さんの円滑な入退院に努めて参ります。

